

会員訪問記 その6

会員大関惇恕さん宅に「栄冠」を見に行く

事務局 小泉不二男

12月4日の早咲き椿展に「栄冠」が出品された。

持って来られたのは大関惇恕さん。この花を見るのはかれこれ10年ぶりかそれ以上になるか。かつてバス見学会で出かけた際、同じく大関さんが一輪携えてきた。グランサム椿の交配種そのものも珍しいが、絞り花はさらに貴重だ。この手の花をほかに知らない。

会場で久しぶりの栄冠を写真に撮ったり眺めたりしていると「今、家で満開だよ」「木は背丈を超している」と云われた。戸外で育っていることに興味を引かれ、元木を見に出かけてみることにした。

土浦市烏山が大関さんの住所。近くの国道バイパスは常々往来しているものの、お宅に寄るのは10年ぶりかそれ以上か。毎月のように幹事会やら椿展で顔を合わせているから、逆におろそかになっただろう。

訪問日は12月23日。

再訪してみてもお目当ての栄冠もさることながら、まず、たくさんの椿盆栽に驚いた。10年前より数が相当に増えている。

先だつての椿展に、大関さんはまさに見ごろのユーレタイトの盆栽を飾られた。椿展にピタリ合わせるかのように見事に咲いた花に誰もが足を止めたものだ。この夥しい椿盆栽の中から花期を迎えた鉢を持参されたものだろう。椿展ごとに、見ごろの椿を何鉢も出品できるのも頷ける。



ユーレタイト（早咲き椿展より）



大関さん宅の椿盆栽

コンクリートで造られたガレージの屋上にも案内された。松や山野草類がこれまた無数にある。そのうちのひとつ、寒グミはこれから赤く色付き土浦で開かれる1月の盆栽展に並ぶ予定という。大関さんは盆栽会の会長でもある。ぎっしり置かれたとりどりの盆栽には丁寧に置き肥がされて、盆栽展での出番を

待っている。

さて、目指す栄冠だが、真冬の庭でたくさんの花と蕾を着けている。2mは優に越しているだろう。樹勢もいい。節間も十分にある。寒さに負けていない。この樹高まで10年以上を要したという。

「栄冠」は、日本ツバキ図鑑（ツバキ協会編）に吉川和男氏が1980年代に発表とある。ティンカー・ベルとグランサム椿の交配種である。ティンカー・ベルは1958年ヌッチオの作出でジャポニカである。（「洋種椿品種第6版」コーベカメリア）。写真で見ると絞りががあるので、これが栄冠に遺伝したものだろう。

オータムグローリー以来、難しいとされるグランサムとジャポニカとの交配で成功した希少な例の一つといえる。日本人によって初めて絞りが入ったことも嬉しい。オータムグローリーをかの地では「オーストラリアの誇り」と讃えたと何かで読んだが、とすれば我々は栄冠を何と称すべきか。



栄冠

愛培10年で樹高2mほどに。

防寒なしで冬越しを続けている。つややかな葉で、節間が伸び樹勢がよい。耐寒性を持っている。日当たりのよい上部にたくさんの蕾がある。秋から冬にかけて咲き続ける。露地ではほかの椿同様に花弁が霜で変色するが、枝を室内に入れると見事に咲く。実を付けたことはないという。



栄冠（早咲き椿展より）



ティンカーベル

（洋種椿品種第6版より：コーベカメリア）

栄冠以外にも同じく寒さに弱いと思われがちな初黄など黄色椿系の種間雑種が育っている。椿展で人気の高い「新世紀」が背丈ほどある。黄色系によくあるが12月のこの時期に新芽を伸ばしてしまい、霜枯れした新葉が痛々しい。にもかかわらず蕾を着け、なかには大きく膨らませた開花間近のものもある。そういえば新世紀を度々椿展で飾り、見る人をバラなのか椿なのかと惑わしてきた中村茂さんも「新世紀は外で育てています」とおっしゃっていた。



大関さん宅の新世紀（樹高背丈ほど） 新世紀の花（平成26年椿展より）
11月に新芽が伸びだし霜枯れ。 これまでの椿にない花色と花形が魅力
但し、蕾が膨らんでいる。

あれこれと見るうちに冬至を控えた冬の陽は早くも傾いて、寒さを気遣った奥様に招き入れられてお茶をごちそうになる。温まってあらためて室内を見回せば、窓際の「ミキオ」の葉がつややかだ。去年の椿展で一番の注目花だった。越牡丹もある。

椿以外にも、大きな水槽に50センチを超す熱帯魚が悠然と泳いでいる。鳥とは思えぬ明るい水色のセキセイインコが鳥かごで跳ねている。黄色もいる。魚は息子さんが飼われている由。夕闇が迫る中、長居を気にしつつも、椿から鳥へさらに魚へとついつい話に聞き入ってしまうのだった。